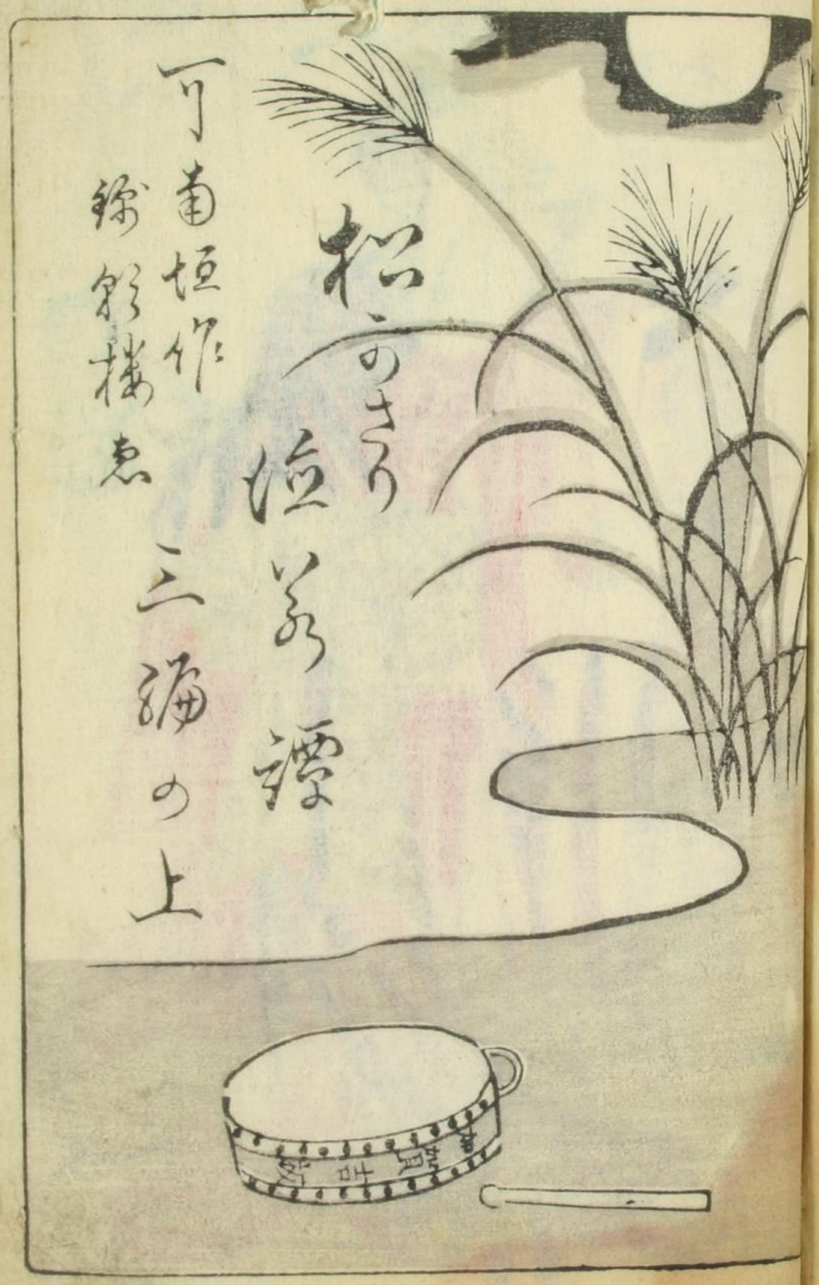
春盛堂
壽梓

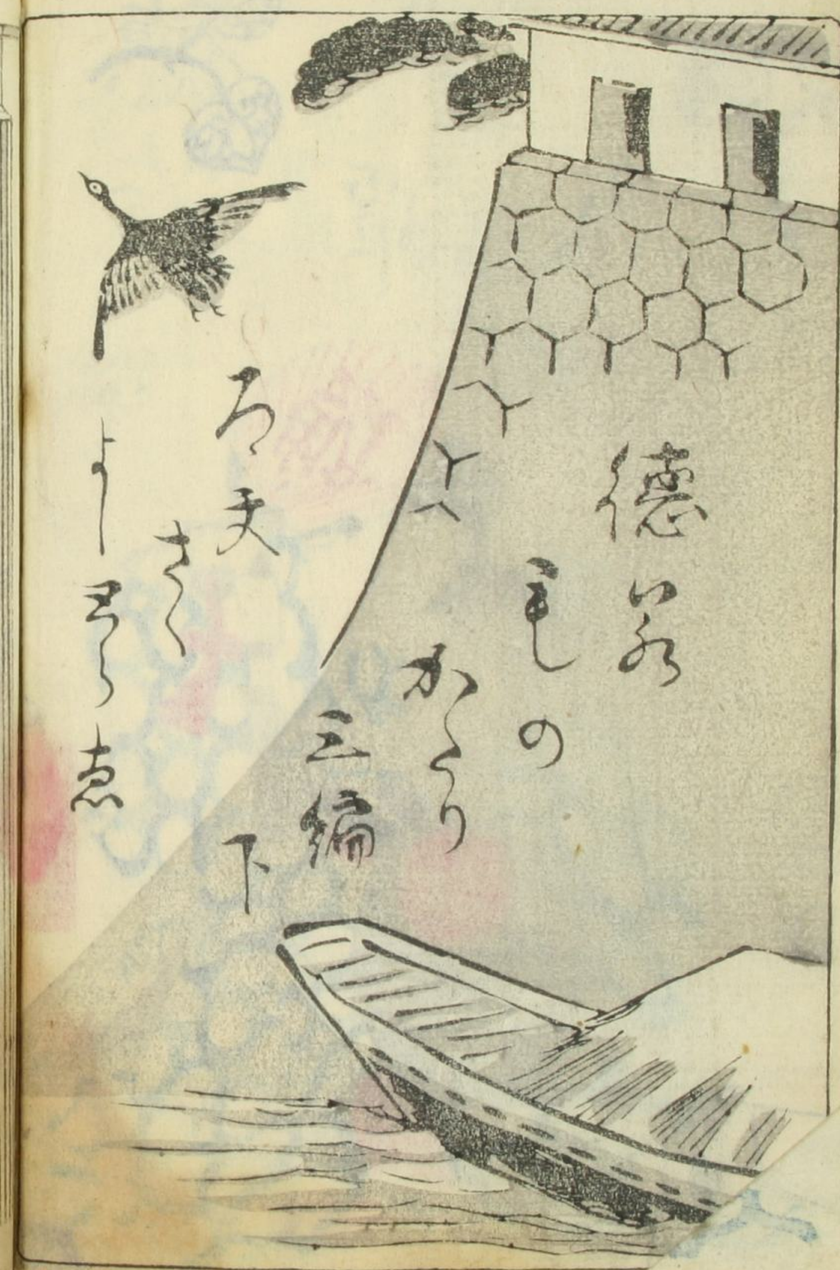
假名垣魯文作
緑郭樓芳虎画

三四編

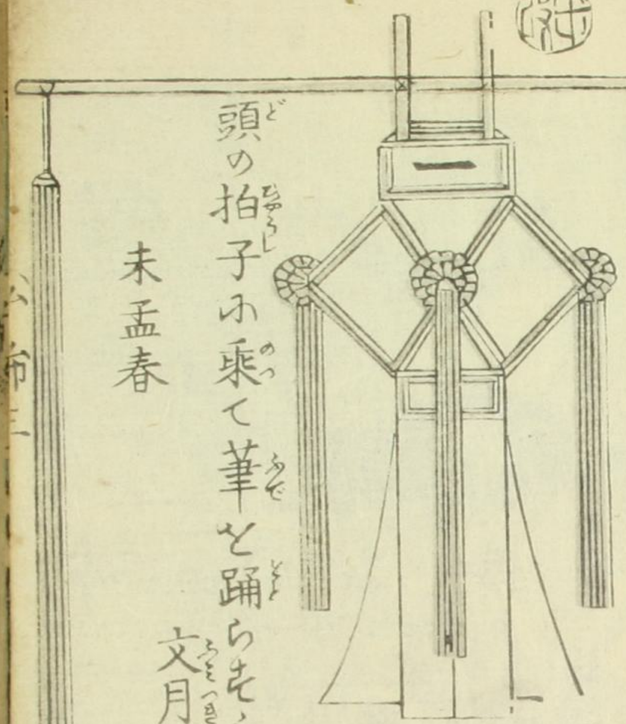

松のさり
塩竈
可南垣作
緑彩楊志
三編の上

A398

松飾
徳右
假名垣魯文作
錦朝芳虎画
譚
辛未春
青盛文庫



曲亭主人が俳諧歳時記秋の部踊躍の條ふ書言古事を引て訝鼓戯の説てり彼王子醇が軍士ふ教へて敵を破りし吏を惟つが當端繪ゆい相當と題目踊の漫に題し松飾りの称ふ反きるい所謂盆と正月を一夏ふまとめる踊の輪三編まハッく煙草ふ休いぞ続いて四輯の懸踊り書肆が音頭の拍子ふ乗て華を踊らせそ文月ふ因む

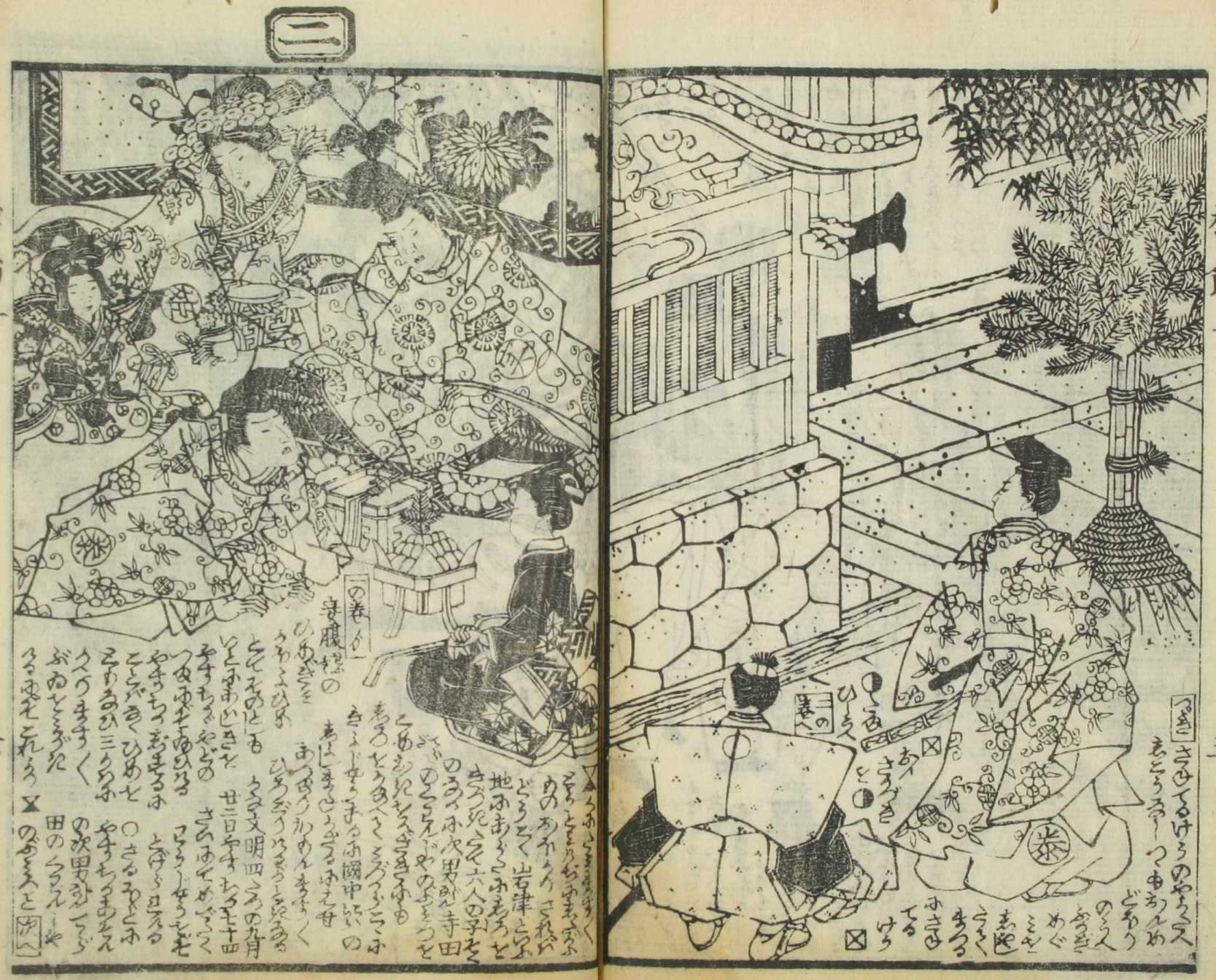


未孟春

假名ごの義しるし

小田の信定入道
月巌旗下
安祥城
柳田掻磨定教
文明十二己丑
七月十五日の夜定教城下西の原ゐて盆踊りへ見物の
空居を計りて柔
近の嫡子延満
不意
永城を抜城王定教と

討取安
祥延満
の手に
入て
西三河を
威勢
を振へり
當家の
栄元此一戦
を起す
○寺田冠者
延満



次へ

柳田定教討死の図

今川氏親
北條早雲

○寺田長親の嫡子
次郎三郎延忠
酒色ふ沈り
大者りを
極る之
図

松飾徳若譚　五編　六編　七編　孟齊芳虎画

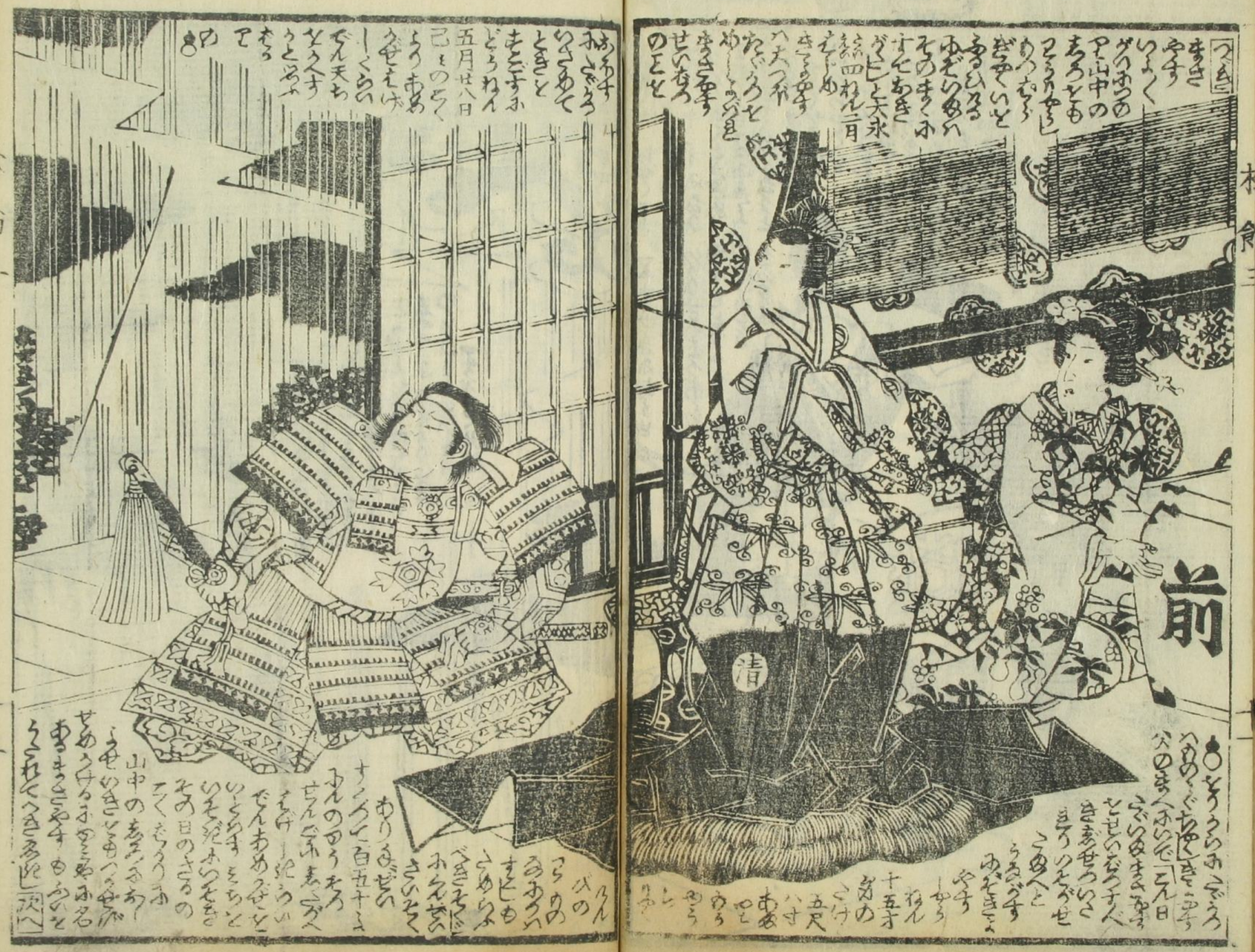
今朝春三組盃　初編　二編　三編　山々亭有人補綴　三遊亭圓朝作話　錦朝楼芳虎画図

いろは竹郎要　初編　十編　山々亭有人作　歌川周重画

繪本太豐記　初編　二編　三編　孟齋芳虎画作

地本問屋　両國廣小路　加賀屋吉兵衛板

三
上の巻より
ちゃく子
清安
つづき

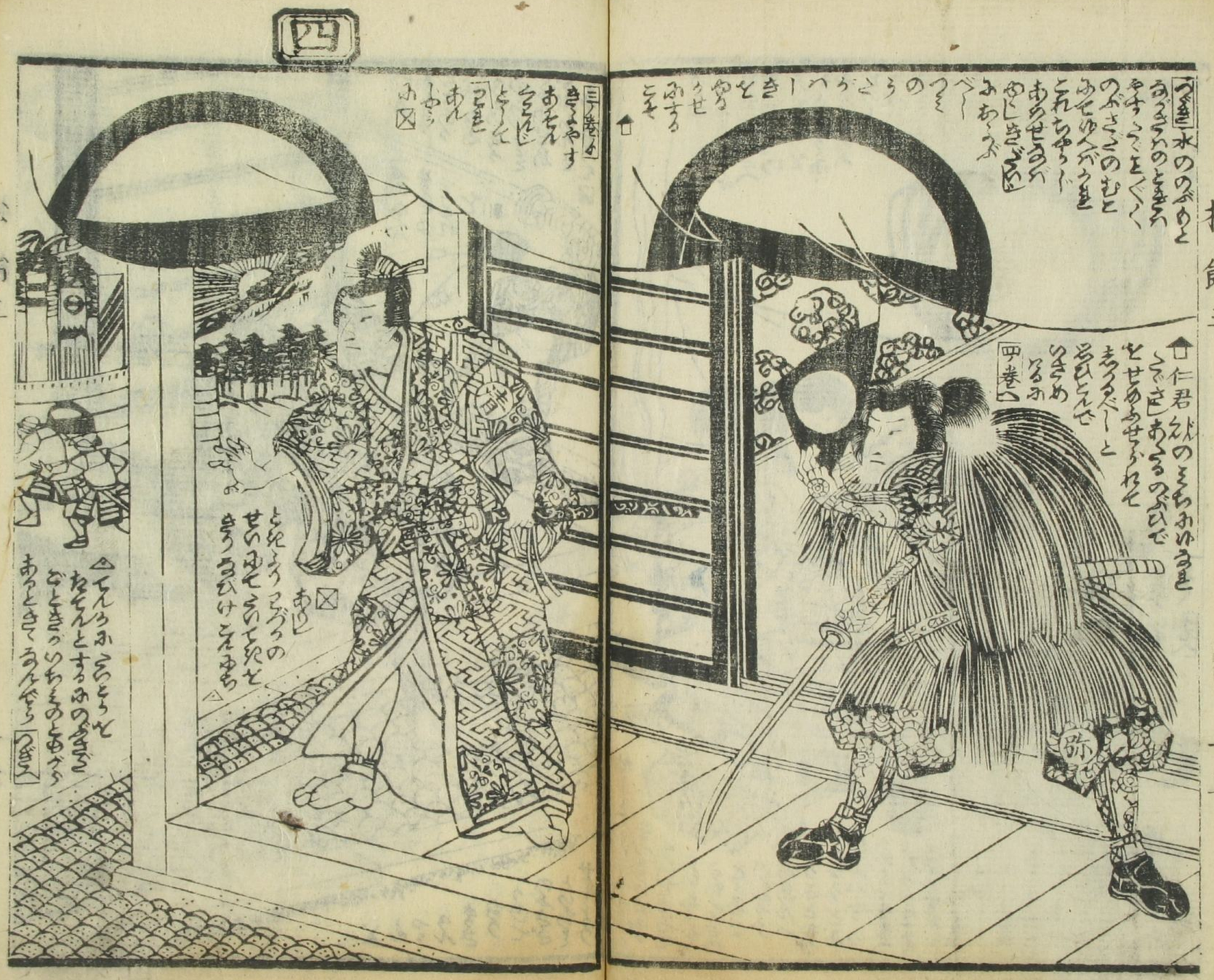

前
清

つるき
つのゝ山中とうるを見
のアあるぐずつとあけて
ビむすめとをさまやす
こうふ さそ多つまろうえん
とうぶとをぬ死てつをと
毒すふめとうのいみ
のちうをとしびまき
ずぶちく女八

世ふろうれ見美な
ぢくうえべきくふやすうれ
と毒ぬひたのむをふ
ちくせくるうのめう
さうふ

正

弥



阿部四郎兵衛

曾文綴芳虎画
定

栄
可吉利
四編上

四編下
四編上

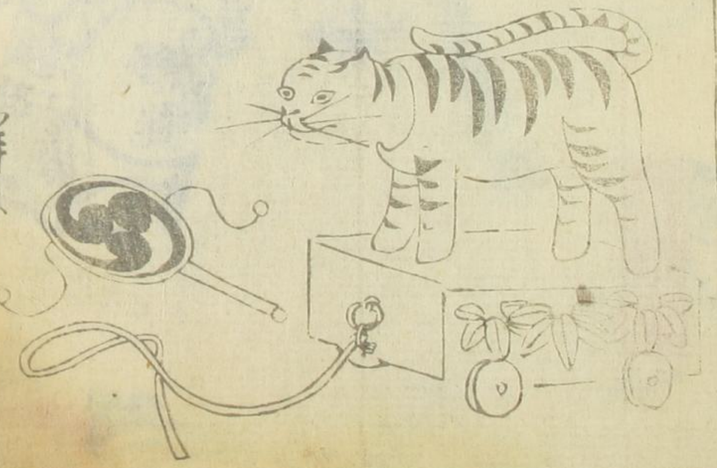
德美濃

四編下

魯文作

孟亀画

青盛文庫



叙

余ガ當稗史ヲ著述ル起原ハ。年來花主仏青盛主人。観音参詣の帰路。足弁天山の定席ニテ。南龍ぬしガ軍談の切ヲ聴ル張扇。それガ乗地の種本ヲ。其侭生捕注文ヲ。僅作意ヲ混ぜ。婦幼童蒙ふ奥ヘ。ろんと。當編ふの根の遂ぬ實録。こゝ出ス。虚妄方便喃くといふ口繪の虎ガ抑ゆらの盤觴ニテ。千里ヲ走る評判ハ。覚束なくも看官ヲ。呼子鳥てふ

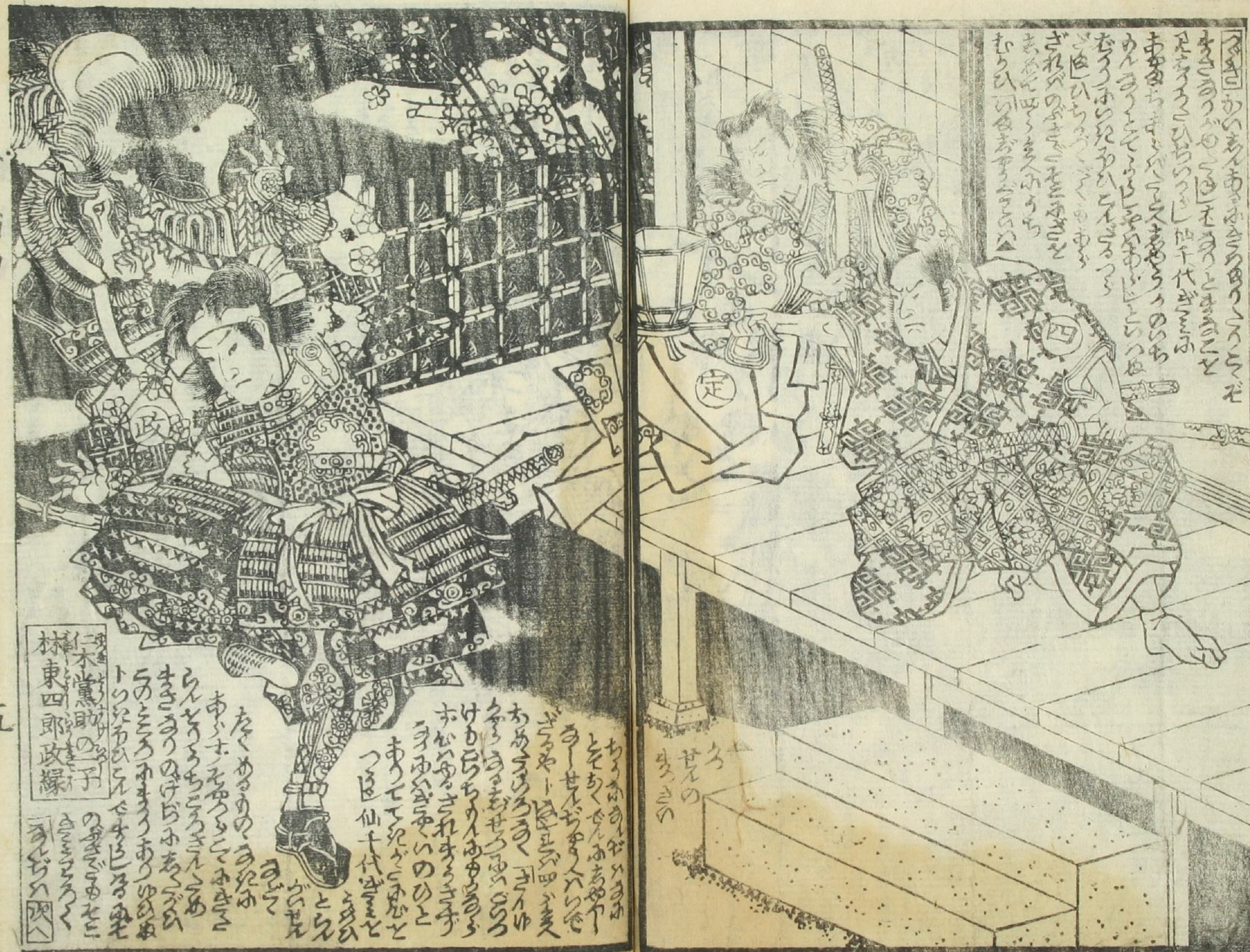
そん寅申
日輪を保護
天下泰
平なり
○今川治部大輔
源義基
○織田上總介
平信長
○義基嫡子
冠者氏實

意ふて。繪組ふ面らふ猿ぢろ。三本足らぬ毛作者だ色ひ。
脚色ハ小枚め小説風調。末長久ま結ぢめぐ。ろ。物目
長篠ふ御高覧と。味方ぢ腹ゆ同意ぢる。画工梓主ゆ倡俱ふ。
冀ふい御代の徳若草史。追く次編結らぢだ〜ぢ。
關ごぢ。ぢ〜より著体ゆ。難波戦記乃よ〜ぢ〜ぢ。
わ〜ぢ川ろ〜ぢ山ぢ。ぢ御陣。千秋萬歳ぢん〜ぢ。
お家ゆ市ぢ。ぢのゆ〜ろ〜ぢ。れ見ぢ〜ぢ〜
わんぢ〜ぢめぢ。呉竹結ぢ〜〜白ぢ

明治四未歳
新板發兌

假名垣魯文誌

○此半葉の繪と読ハ本文累世ぢ童蒙ホ心得ぢ。ん。この一助ぢり



五

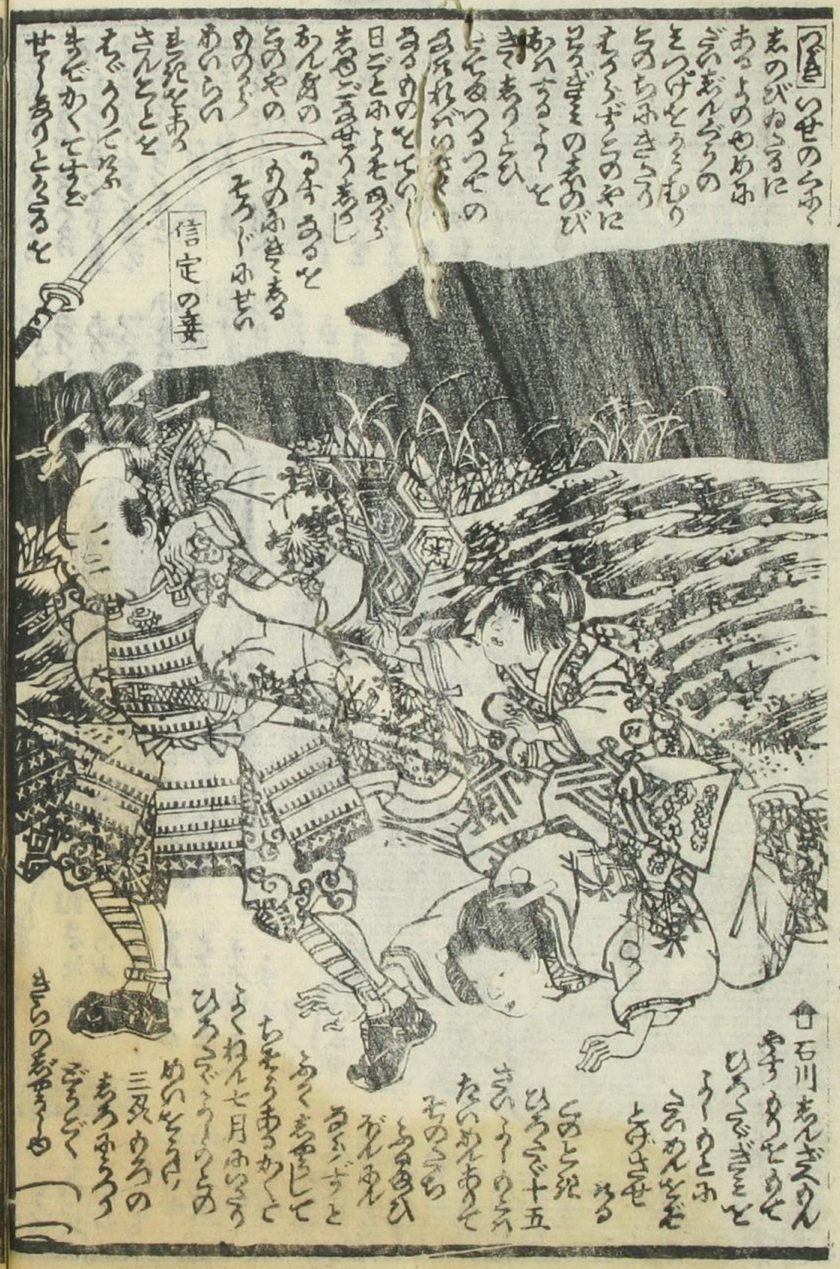
魯文著　芳虎畫

鍛冶と誤ること　古へ故ゆ　暫く俗習ゆ

鍛冶

高塚

四


信定の妻

のぶ定
十六
大へ

廣忠
主從
今川家の
使者朝比奈
小隼人を出迎と

立祥筆
本文おそえそう
朝

相模国鎌倉鶴岡八幡宮

○天文十一
壬寅年
十二月廿
六日寅の
大徳若
丸誕生
の図
かくてひろうで
いる川けの
ひがみこう
西条殿のきっ
うきをとりけどうて
正

廣
兼
○作者曰
此巳と終る
とう推るふ
時ハ庚午の
十二月廿
六日夜ゝ
最も不
思儀
の因縁
あふ
すぢや
墓目の役
石川清兼

松飾徳若譚 五編 六編 七編 假名垣魯文作 孟齋芳虎画
今朝春三組盃 初編 二編 三編 山々亭有人補綴 三遊亭圓朝作話 錦朝楼芳虎画図
[illegible]妓[illegible]要 初編 十編 鄙川周重画
繪本太豐記 初編 二編 三編 孟齋芳虎画作
地本問屋 両國廣小路 加賀屋吉兵衛板

櫻田伏見町

010190518545

辛未春
青盛堂梓

[illegible]

この年の紀 魯文作

第三編

[illegible] 芳虎画